様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２４９

研究課題名（和文）日本と東アジアにおける神仏習合と漢文説話の研究

研究課題名（英文）A study on the harmonization of Shinto and Buddhism in tales writiten in Chinese characters in Japan and East Asia.

研究代表者
袴田　光康（Hakamada, Mitsuyasu）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：９０５５２７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本・韓国・琉球の漢文テキストを通して、東アジアにおける神仏習合の分析を行った。具体的には『扶桑略記』（日本）・『三国遺事』（韓国）・『遺老説伝』（琉球）という三つのテキストを対象とした。研究の結果として、東アジアの固有神が仏教によって護国神へと変容するという共通点を持つこと等を明らかにした。その成果は、2013年度韓国日本言語文化学会（ソウル）の口頭発表や『「三国遺事」の新たな地平』（勉誠出版、2013年11月）の論文などによって広く発表されている。

研究成果の概要（英文）：In this research, the harmonization of Shinto and Buddhism in East Asia was analyzed in Chinese-character texts from Japan, South Korea, and Ryukyu. Specifically, the objects of this research were the three texts "Fusoryakki" (Japan), "Sangokuyusa" (South Korea), "Irousetsuden"(Ryukyu). This analysis showed clearly that the peculiar God of East Asia has the common feature of being changed into a national guardian deity by Buddhism. The analysis results have been presented at the South Korea-Japan Language Culture Society (in Seoul,2013) and publised in papers appearing in "A New Horizon of Sangokuyusa" (Bensei publishing, November, 2013).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国際情報交換　韓国　三国遺事　東アジア　神仏習合　琉球説話　歴史叙述

１．研究開始当初の背景

(1)　従来の神仏習合の研究は、神道と仏教の融合という観点から、専ら日本国内の宗教的問題として論じられてきた。しかし、古代の固有神が仏教化したり、仏教と習合したりする現象は、大乗仏教の伝播した東アジア地域に広く見られるものである。今日、「東アジア漢字文化圏」が文学研究において注目されているが、まさに、神仏習合の問題に関しても広く東アジア地域に目を向けることが必要であり、その比較を通して日本の独自性もより一層明確になるものと考えた。

(2)　研究代表者である袴田は、2009 年以降、『三国遺事』の研究会を主催してきた。同書は、高麗時代に一然という僧によって編纂された韓国の書物であるが、古代朝鮮の神話や歴史、あるいは仏教関係の説話などを収めた貴重な漢文テキストである。日本の朝鮮史研究においても、同書は、『三国史記』と並ぶ古代朝鮮史の史料として重視されてきたが、1970 年代に三品彰英の『三国遺事考証』がまとめられてからは、この分野の研究にほとんど進展が見られなくなったのが現状である。こうした状況に鑑み、神仏習合の研究対象として『三国遺事』を積極的に用いることで、同書の研究が活性化することを期待した。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本・琉球・韓国のそれぞれの地域の仏教説話を比較分析することによって、東アジアにおける固有信仰と仏教との神仏習合に見られる特徴を明らかにすることである。日本・琉球・韓国という隣接した地域は、古くから中国文化の影響下にあり、漢字・律令・儒教・仏教などの多くの文化を共有してきた。一方、日本の神道、琉球のニライカナイ信仰、韓国の天神（ハヌニム）信仰などは、それぞれの地域の固有信仰であると同時に、太陽信仰・山岳信仰、祖先崇拝などの共通した要素を持っている。こうした観点からすれば、神仏の習合現象においても類似した構造を持つことが予測される。

確かに、日本の太陽神であるアマテラスは大日如来と習合し、琉球のヲボツカグラは観音と習合し、韓国のハヌニムは帝釈天と習合するというように、表面的にはそこには何の共通性も見られないように思われる。しかし、日本の仏教説話においては、古い在地の神が仏教に救いを求め、仏教者の守護神へと変容するというパターンが多く見られる。これは、固有神が仏教に帰依することを示す仏教優位の習合の論理に他ならない。その仏教優位の論理の中で、固有神は仏教と結びつくことで従来の土着的な神を脱して、護法神や護国神として国家的な規模の新たな神として再生することになる。

つまり、神仏習合とは古来の神祇体系の再編でもあったということである。天神信仰や権現信仰をはじめとする平安中期以降の新たな神々の誕生も、この神祇体系の再編と密接に関わるものと考えられる。こうした仏教化による固有の神々の再生と誕生は、果たして琉球や韓国などの隣接地域にも見られるものなのだろうか。もし、そうだとすれば、それは説話世界の中でどのように描かれ、どのように語られているのか。また、それらを語る琉球や韓国の説話と日本の説話との違いはどこにあるのか。こうした問題を明らかにしていくことが、本研究の主要な課題であった。

３．研究の方法

(1)　具体的な研究対象として、『扶桑略記』（11 世紀、日本）、『遺老説伝』（18 世紀、琉球）、『三国遺事』（13 世紀、韓国）という三つの漢文テキストを選んだ。これらの三つのテキストは、成立した時代も地域も異なるが、正史とは異なる観点から編纂された書物であり、その歴史叙述の中に仏教的な逸話や説話が数多く含まれるという類似した性格を持っている。このため、東アジアの神仏習合の比較をテーマとした本研究の対象として適当であると判断した。

(2)　上記の三つのテキストにそれぞれ研究分担者を割り当て、三つのグループを組織した。グループごとにワークを進める方針を取った。『扶桑略記』のグループでは、仏教関係の用語の検索と共に神仏習合に関係する説話のピック・アップとその出典調査を行った。『遺老説伝』のグループは、宮古島や八重山諸島などの「旧記」類との比較を行い、本文校異のデータ化を進めた。『三国遺事』のグループは、韓国で新たに発見された初刊本を底本とした本文の校異作業を進めると共に、『三国遺事』の仏教用語の検索作業を行った。『三国遺事』の研究会に全体会議の役割を与え、各グループの進捗状況や問題点などを話し合う場とした。

(3)　研究が進むにつれて、各グループの進捗状況に開きが見られるようになった。このため、研究期間の後半からは、最も成果が見込まれる『三国遺事』の研究に特に重点を置き、『三国遺事』に『扶桑略記』・『遺老説伝』の各説話を比較する形に修正した。『三国遺事』の研究を中心に据え直したことに伴い、韓国の研究者との意見交換、情報交換を図るべく、韓国での学会発表や論文発表を積極的に推進した。

４．研究成果

(1)　古代神話における母子信仰

日本と韓国の神話において、太陽信仰を基盤とした日光感精型と呼ばれる類似的な話型が見られることは、既に民俗学や文化人類学などの研究によって明らかにされてきたが、具体的に個々のテキストを詳細に比較検討される機会は決して多くはなかったように思われる。

本研究では、『三国遺事』所収の「延烏郎細烏女」伝承・「朱蒙」伝承について、日本のア

メノヒボコ伝承との具体的な比較を行った。その結果、『三国遺事』に見られる日光感精神話は、王権の起源と結びついて王権神話として語られる傾向が強いが、日本においては流離する母子の神という母子信仰として展開されたことが明らかになった。日本の母子信仰の典型は、記紀神話の神功皇后神話、九州に起こった八幡信仰、そして対馬の天道信仰などに見られるものであるが、なかでも特に八幡信仰の形成は、日光感精型の母子信仰において、最も早い時期に神道と仏教が習合した現象として注目される。

対馬や九州は、朝鮮半島の文化的な影響を強く受けた地域である。韓国にもムーダン（巫女）の謡う「ポンプリ（本解）」の中には、「タムグンエギ」のような母子神の信仰が見られる。それは、ムーダンの起源の語りとなっているが、仏教色の強い『三国遺事』では、巫俗文化やその伝承を回避したものと見られる。但し、韓国の巫俗文化が古来の固有信仰に遡ることからすれば、そこに見られる太陽信仰と母子信仰が、古代日本の神仏習合に大きな影響を及ぼしたことは明らかである。

(2)　平安仏教における外来神

平安仏教の中には、赤山明神、新羅明神、摩多羅神、牛頭天王などの異形の神々が含まれている。これらの神々は、いずれも正体不明であり、少なくとも古神道には見られなかった神たちである。これらの新たな神は、海を渡ってきた外来の神であると言われるが、本研究では、特に平安中期以降に形成される延暦寺の赤山明神と三井寺の新羅明神に焦点を当て、『三国遺事』に語られた習合神（山の神）との比較を行った。

赤山明神は、入唐僧円仁が、中国山東省の赤山法華院から請来したものと伝えられるが、円仁の『入唐求法巡礼行記』には、赤山明神のことは全く記されていない。赤山法華院は、在唐新羅人の頂点にあった張宝高（チャン・ボコ）が創建したもので、その際に赤山の地主神を寺の守護神にあてたものが赤山神と考えられる。その赤山神は、法華院の守護神から新羅人の守護神へ、更に唐の廃仏などを背景に仏教徒全体の守護神へと変容したものと考えられる。それが、新羅僧らと深い交流を持った留学僧を通して、日本にも齎されたものであろう。円仁請来は仮託の可能性が高いにしても、赤山神は、入唐僧らを援助した新羅僧らの在唐新羅人社会で信仰された神で、既に新羅社会において仏教化した神であったと見られる。これを入唐僧が齎し、延暦寺の護法神、更には王城の守護神として信仰されるようになったものと考えられる。

また、三井寺の新羅明神は、円珍を守護して日本に渡り、円珍を三井寺の地に導いた神と説かれるが、その一方では古くから三井寺を守護してきた護法神のようにも説かれる。いずれにせよ、新羅明神は仏教を守護する存在であり、それは、仏教に帰依した地主神の神格に近いことを示している。仏教者を聖地に導く地主神（山の神）の話型は、縁起譚などに多く見られるが、『三国遺事』の花郎伝承などにも共通した要素が見られる。特に、日本の新羅明神にも新羅の花郎伝承にも、彌勒信仰が深く関係しているが、これは古来の山岳信仰が仏教の彌勒信仰と融合していったことを物語るものと考えられる。このように日本と韓国との神仏習合には類似した論理構造があることを明らかにした。それと同時に、日本の修験道と新羅の花郎道の類似性という新たな課題も浮上してきた。

(3)　『三国遺事』と琉球の伝承世界

『遺老説伝』と『三国遺事』の共通する話型として「竜宮訪問」譚と「炭焼長者」譚に注目した。日本でも琉球でも韓国でも「竜宮」という言葉が使われているが、琉球や韓国では、海幸山幸や浦島伝承のように男性が竜宮を訪れるのではなく、女性が竜宮を訪問するという形が多く見られる。これは、共に「神の嫁」である巫女の流離を語るものであるが、それぞれの描く「竜宮」のイメージは大きく異なっている。『三国遺事』では七宝の宮殿など仏教的な荘厳化が著しいのに対して、『遺老説伝』では仏教色は希薄で、土俗的なグロテスクさが認められる。『三国遺事』の「竜宮」は、むしろ 16 世紀に記された『琉球神道記』の「竜宮」記事に類似する。『琉球神道記』は、成立年代も『三国遺事』に近く、編者が共に仏教者であるという点でも近似している。これに対して、『遺老説伝』の「竜宮」は規範や儀式の根源であり、それは伝統的なニライ・カナイの信仰に基づくものであったと考えられる。

また、「炭焼長者」譚は、日本でも韓国でも見られ、東アジアに広く流布しているが、この伝承は鉄の生産と深く関わることが指摘されている。鉄を豊かに産出した百済を舞台とした、『三国遺事』「武王」条の伝承では、金（鉄）を産出する者が王になることが語られており、一種の王権譚として機能している。

一方、琉球では地理的条件により鉄を産出することがない。それにも関わらず、第三王統の始祖である察度王について「炭焼長者」の話型が用いられている。これは、輸入された鉄や金属の流通を支配する者こそが王であることを意味する近世的な王権譚であると言える。但し、あくまでも、金の発見（鉄の産出）は、鉄の産出のない琉球ではメタファーに過ぎない。つまり、実質の伴わない「炭焼長者」譚が琉球では語られたことになるが、それは、先に「炭焼長者」譚が鉄を背景とした王権譚として韓半島で語られ、それが後に琉球に齎された経緯を示唆するものと考えられる。

(4)　データベースの作成

『三国遺事』仏教用語データベースを作成した。このデータベースは、印刷製本した本研究の「研究成果報告書」の資料編に掲載して、関係機関・図書館等に配布した。但し、不備も多いので、研究期間終了後も引き続き、データの補足や整備を進めていきたいと考えている。これを更に日本や中国の仏教用語に広げることで、将来的には「古代東アジア仏教

用語集」という索引の構築を目指していきたい。

(5)　人的交流
本研究では、韓国への学会に積極的に参加するなど、韓国との学術交流を深めてきたが、そうした交流の中から、韓国のチームと 2013 年度日韓共同セミナー（日本学術振興会二国間交流事業）を開催することに繋がったことは、副次的な成果ではあるが、本研究に関係する特筆すべき事柄として最後に報告しておく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２９件）
①堂野前彰子、「『常陸国風土記』に描かれた倭武天皇」、『茨城県史研究』（茨城県立博物館）、査読無、2014 年 3 月、98 号、1-15
②袴田光康、「『三国遺事』研究の始発と現在―檀君神話をめぐって―」、『アジア遊学』査読無、169 号、2013 年 11 月、4-19
③袴田光康、「『三国遺事』における神仏習合―帝釈信仰と護国思想―」、『アジア遊学』、査読無、169 号、2013 年 11 月、189-202
④金任仲、「義湘大師と明恵上人―『三国遺事』と『華厳縁起』を中心に」、『アジア遊学』（勉誠出版）、査読無、169 号、2013 年 11 月、102-116、
⑤木村淳也、「『三国遺事』と琉球の伝承世界」、『アジア遊学』（勉誠出版）、査読無、2013 年 11 月、117-131
⑥堂野前彰子、『三国遺事』と日本神話―日光感精神話の行方、『アジア遊学』（勉誠出版）、査読無、2013 年 11 月、169 号、50‐59
⑦堂野前彰子、「黄金神話と王権―琉球説話集『遺老説伝』と『三国遺事』の比較から」、『淵民学志』（淵民学会）、査読有、2013 年 8 月、20 輯、215-239
⑧金任仲、「徐福渡来伝説―済州島を中心に―」、『東アジア文化研究所紀要』（韓国全南大学校）、査読有、4 号、2013 年 7 月、47-61
⑨堂野前彰子、「歌垣考―速総別王の逃避行から」、『文化継承学論集』（明治大学大学院文学研究科）、査読有、2013 年 3 月、第 9 号、１-9
⑩金任仲、「『唐法蔵致新羅義湘書』の書簡をめぐって」、『淵民学志』（韓国淵民学会）、査読有、19 輯、2013 年 2 月、223-265
⑪袴田光康・西野入篤男「金沢文庫本「琵琶引」の本文と訓読」、『白居易研究年報』、査読無、13 号、2012 年 12 月、192-215
⑫金任仲、「新羅僧義湘と善明―『華厳縁起』を中心に」、『文芸研究』（明治大学文学部紀要）、査読有、118 号、2012 年 10 月、37～54
⑬堂野前彰子、「神武の来た道―丹と交易」、『文芸研究』（明治大学文学部、）査読有、2012 年 10 月、第 118 号、1-15
⑭木村淳也、「「遺老伝」の行方―『遺老説伝』所載の「銘苅子」、「無漏渓」伝承を考える―」、『説話文学研究』（説話文学会）、査読有、2012 年７月、第四十七号、75-86
⑮堂野前彰子、「狂女のいる風景―柳田国男と久世光彦―」、『文芸研究』（明治大学文学部）、査読無、2012 年 3 月、第 117 号、38-44、
⑯堂野前彰子、「鉄をめぐる古代交易の様相―楽々福神社鬼伝承を中心に―」、『文化継承学論集』（明治大学大学院文学研究科）、査読有、2012 年 3 月、第 8 号、13-22
⑰堂野前彰子、「『遺老説伝』に描かれた御嶽―その「市」的な機能―」、『奄美沖縄民間文芸学』（奄美沖縄民間文芸学会）、査読有、2012 年 3 月、11 号、23-32
⑱堂野前彰子、「豊前路と憶良―嘉摩郡三部作を中心に―」、『日本古代学』（明治大学日本古代学教育・研究センター）、査読有、2012 年 3 月、第 4 号、37-48
⑲袴田光康・許敬震「特集「新羅と日本の神話」に寄せて」、『淵民學志』（韓国淵民古典文学学会）、査読無、17 号、2012 年 2 月、13-16
⑳袴田光康、「平安仏教における新羅明神―園城寺の由来伝承と新羅の弥勒信仰―」、『淵民學志』（韓国淵民古典文学学会）、査読有、17 号、2012 年 2 月、87-128
㉑堂野前彰子、「神話と夢―日韓の比較から―」、『淵民學志』、査読有、2012 年 2 月、第 17 輯、55‐86
㉒木村淳也、堂野前彰子ほか、「遺老説伝注釈（10）―巻第二　第六七話～第七二話―」、『文学研究論集』（明治大学大学院紀要）、査読有、2012 年 2 月、第 36 号、185-188／193- 199
㉓袴田光康、「金沢文庫本「長恨歌」の本文と訓読（訓読篇）」、『白居易研究年報』、査読無、12 号、2011 年 12 月、110-183
㉔金任仲「西行における華厳思想と和歌」、『文芸研究』（明治大学文学部紀要）、査読有、115 号、2011 年 10 月、55～73
㉕堂野前彰子、「『古事記』と交易の道―小浜神宮寺「お水送り」から―」、『文芸研究』（明治大学文学部）、査読有、2011 年 10 月、115 号、35-54
㉖堂野前彰子、「琉球説話集『遺老説伝』の世界―「移住」と「交易」―」、『淵民學志』、査読有、2011 年 8 月、第 16 輯、49-92
㉗木村淳也、「琉球における漢文テキストの作成者―その概要とテキスト研究への可能性―」、『淵民學志』（韓国淵民學會）、査読有、2011 年８月、第 16 輯、93－149
㉘袴田光康、「平安仏教における外来神―円仁と赤山信仰―」、『淵民學志』（韓国淵民古典文学学会）、査読有、15 号 2011 年 5 月、217-278
㉙金任仲、「西行の和歌起請」、『国文学解釈と鑑賞』、査読無、2011 年 3 月、76 巻 3 号、142-150

〔学会発表〕（計１６件）

①木村淳也、「重層し変奏する琉球の航海神―東アジア世界との関わりから―」、立教大学日本学研究所 2014 年１月例会・シンポジウム「琉球・薩摩と東アジア ―人と文物の往還―」、2014 年１月、立教大学（東京）

②金孝珍、「正徳元年朝鮮通信使への饗宴ー新井白石と吉宗をめぐって」、2013 年日韓共同セミナー「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」、2013 年 12 月、静岡大学（静岡市）

③堂野前彰子、「古代文学と東海の道」、二国間共同セミナー、2013 年 12 月、静岡大学（静岡市）

④木村淳也、「箕隅御嶽の由来譚を読む―旅の儀礼と伝承の創作」、日韓共同セミナー「朝鮮通信使と琉球使節団の比較研究」、2013 年 12 月、静岡大学（静岡市）

⑤袴田光康、「『三国遺事』研究の過去と未来」、韓国日本言語文化学会、2013 年 11 月、韓国外語大学（韓国・ソウル市）

⑥堂野前彰子、「古代日本文学における鬼と笛」、韓国日本言語文化学会、2013 年 11 月、韓国外国語大学校（韓国ソウル市）

⑦堂野前彰子、「『常陸国風土記』の倭武天皇」、常陽史料館特別展示「常陸国風土記」の世界」展での講演会（後援：茨城県・茨城県教育委員会・水戸市教育委員会）、2013 年 4 月 13 日、常陽藝文センター（常陽市）

⑧袴田光康「『扶桑略記』と『三国遺事』―歴史叙述と国家観―」、明治大学古代学研究所公開シンポジウム、2013 年 3 月、明治大学（東京）

⑨金孝珍、「平安時代の正妻・次妻考－東アジアとの比較を通して」、交響する古代Ⅲ－古代東アジアの国際交流、2013 年２月、明治大学（東京）

⑩堂野前彰子、「アメノヒボコと常世」、<延烏郎細烏女>日韓国際セミナー：－<延烏郎細烏女>神話中心の日韓民間交流史－（、主催：慶北日報、主管：<延烏郎細烏女>研究所、浦項文化院　後援：浦項市）、2012 年 10 月、浦項市庁大会議室（韓国浦項市）

⑪木村淳也、「『遺老説伝』の説話構成にみる近世琉球の領域意識」、第３回高麗大学校・明治大学国際学術会議「韓・日　文学 歴史学の諸問題」、2012 年 9 月、高麗大学校（韓国・ソウル市）

⑫金任仲、「徐福渡来伝説―熊野・済州島を中心に―」、国際熊野学会熊野例会、2012 年 3 月、太地町公民館

⑬袴田光康、「平安仏教における新羅明神―園城寺の由来伝承と新羅の弥勒信仰―」、韓国語学文学文化国際学会、2011 年７月、延世大学校（韓国・ソウル市）

⑭堂野前彰子、「神話と夢－日韓の比較から―」、東アジア文化交流国際学術大会、2011 年 7 月、延世大学校（韓国ソウル市）

⑮木村淳也、「琉球家譜と『球陽』、『遺老説伝』―東アジアの「譜」を視野に入れて―」、第５回韓国言語・文学・文化国際学術大会―東アジア文化交流国際学術大会―、2011 年７月、延世大学校（韓国・ソウル市）

⑯木村淳也、「「遺老伝」の行方－『遺老説伝』所載の「銘苅子」、「無漏渓」伝承を中心に―」、説話文学会第 148 回例会（シンポジウム「琉球の説話・『遺老説伝』を読む」）、2011 年４月、立正大学（東京）

〔図書〕（計１０件）

①木村淳也ほか、明治書院、増尾伸一郎編『交響する東方の知』（知のユーラシア５）、2014 年２月出版予定、

②木村淳也ほか、勉誠出版、島村幸一編『琉球　交叉する歴史と文化』、2014 年 28-50

③立野正裕・堂野前彰子・永藤靖、明治大学リバティアカデミー、「『遠野物語』を読む」（明治大学リバティアカデミーブックレット）、2014 年、94（20-36）

④袴田光康、金任仲、堂野前彰子、木村淳也ほか、勉誠出版、袴田光康、許敬震編『三国遺事の新たな地平―韓国古代文学の現在―』、2013 年、242（4-19、102-116、50-59、117-131、189-202）

⑤日向一雅、袴田光康ほか、青簡舎、日向一雅編『源氏物語　注釈史の世界』、2013 年、400（299-318）

⑥小嶋菜温子、倉田実、服藤早苗、袴田光康ほか、森話社、小嶋菜温子、倉田実、服藤早苗編『王朝びとの生活誌』、2013 年、347（323-344）

⑦金孝珍、木内明編、成美堂出版、『実用日韓・韓日辞典』、2013 年、1023

⑧小嶋菜温子、長谷川範彰、袴田光康ほか、武蔵野書院、小嶋菜温子、長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』、2012 年、806（21-45）

⑨日向一雅、袴田光康ほか、青簡舎、日向一雅編『源氏物語の礎』、2012 年、360（201-224）

⑩袴田光康、秋澤亙ほか、武蔵野書院、袴田光康、秋澤亙編『源氏物語を考える―越境の時空―』、2011 年、234（85-119）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等　なし

６．研究組織

(1)研究代表者

袴田　光康（HAKAMADA　Mitsuyasu）
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：90552729

(2)研究分担者

金任仲（KIM　Ingchong）
明治大学・知財戦略機構・研究員
研究者番号： 30599577

堂野前彰子（DOUNOMAE　Akiko）
明治大学・知財戦略機構・研究員
研究者番号：50588770

木村淳也（KIMURA　Jyunya）
明治大学・知財戦略機構・研究員
研究者番号：40614772

金孝珍（KIM　hyoujin）
明治大学・文学部・講師
研究者番号：20638986

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：